

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26360022

研究課題名(和文) シャーマニズムの実態から見る現代韓国人の心理と社会的背景

研究課題名(英文) Mental State and Social Background of Contemporary Korean People:

研究代表者

金香淑(KIM, HYANGSUK)

京都大学・こころの未来研究センター・連携研究員

研究者番号：70548106

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：韓国伝統社会の特徴とされてきたシャーマニズム(巫俗祭儀、占い等)が、都市化や情報化が進む現代、農村から都市部へ、地方から首都圏へと形を変えながら拡大・浸透している実態を調査した。各地で祈祷処や祭儀場を見学し、シャーマンや祭儀の依頼者へのインタビューを実施した結果、人々が格差や競争の激しい社会で負った心の傷を癒すために、目に見えない霊的なものにすがり現状が明らかになった。成果は人体科学学会や関連シンポジウムで報告したほか、2本の学術論文としてすでに公刊した。日本、韓国のみならず、中国、モンゴル、オーストラリアのシャーマニズム研究者にも注目され、今後の共同研究を見ずえた学术交流を開始した。

研究成果の概要(英文)：The Shamanism, with its specific rituals and oracles, has been considered to be the characteristic of Korean traditional society. In modern Korean society highly influenced by urbanization and computerization, Shamanism expands, transforming its appearance, from agricultural to urban districts, from provincial to metropolitan area. Our study is to investigate the actual expansion and permeation, and for this purpose we visited prayers halls and oratories, where we interviewed with shamans and devotees. We clarified the fact that they cling to invisible and spiritual phenomena so as to heal their trauma caused by social difficulties such as competitive society and disparities. We read papers on both the annual conference of the Society for Mind-Body Science and the symposium on Asian Shamanism. Two theses we have published attracted considerable attention of researchers from Asian countries. We have started academic exchange hoping to start joint multi-national researches on Asian Shamanism.

研究分野：地域研究

キーワード：シャーマニズム 身心変容 癒し 韓国 東アジア 宗教 民俗

## 1. 研究開始当初の背景

韓国文化の重要な基盤を成すシャーマニズム(巫堂主宰の祭儀=クツ、占い、厄払い等)は、従来農村社会の特徴と見なされ、個別の地域に即した風俗として研究が行われてきた。植民地時代の日本人研究者を嚆矢とし、戦後は韓国人研究者によって断続的に実態調査が行われてきたほか、戦後の日本でも崔吉成らが文化人類学的な見地から紹介し、日本などとの比較研究を行ってきた。しかしいずれもデータとしてはいささか古くなっており、今日の実態からは乖離がある。本研究の代表者はその現状を批判的に受け止め、比較神話学の見地から口伝神話の担い手としてのシャーマンの役割に注目し、実際にシャーマンに取材するなどして著書『朝鮮の口伝神話「バリ公主神話」集』(和泉書院、1998年)を発表した(「バリ公主神話」はシャーマンが死霊祭で口述する代表的な物語)。そのほか「朝鮮の口伝神話「帝釈本プリ神話」各異本の類型とその特徴について」(科学研究費基盤研究費 A1 研究成果報告書『現代日本の宗教動態を東アジアの宗教動態と比較して把握する研究』代表:吉田敦彦、2001年3月)において、「帝釈本プリ神話」(家宅祭で口述される)の類型と特徴について考察した。さらに韓国東海岸地域の豊漁祭を直接取材して、シャーマンたちが祭儀の中で口述する口伝神話が時代の変化や世態を反映していることを指摘した(「巫堂の語る神話」学習院大学東洋文化研究所『アジア文化研究プロジェクト』Vol.2 2002年1月)。その後著書『朝鮮神話の源流「バリ公主神話」と「ダンクン神話」を巡って』(春風社、2012年)において、シャーマンの歴史的な位相や研究史について総合的に論じた。これらは日本語で出版された朝鮮神話研究の専著として戦後類例のないものであり、文献神話研究に偏っている韓国国内の状況に照らしてもきわめて貴重なものである。

著書執筆の過程で、韓国社会におけるシャーマニズムの実態に改めて注目するようになったが、戦後アメリカの影響により社会が急激に欧米化した韓国では、シャーマニズムをはじめとする伝統的な風俗・文化が過少評価される傾向があった。そこで2013年8月に本研究の代表者が所属先大学の特別研究費を得て、20日間にわたる韓国国内での予備調査を実施した結果、21世紀の今日においてなおシャーマンが活躍する場面が数多く、依頼者の年齢や性別、社会的地位なども広範囲にわたっていることを確認した。また都市化や情報化が進む今日、従来地域の血縁・地縁に縛られたシャーマンの活動が地域を越えて流動化し、農村部から都市部へ広がっている現状を知り、その実態を総合的にまとめる必要性に着目した。以上が本研究開始に至るまでの経緯であり、日本および韓国での研究の現状である。

## 2. 研究の目的

今回の研究は現時点における韓国シャーマニズムの実態を、現地調査を通じて具体的に明示することを目標とする。シャーマンが活躍する地域、地点、場面や、事由(誰が、何のために依頼するのか)について、できるかぎり多くの事例を実見し、シャーマンや依頼者に対するインタビューを行う。その目的は以下のとおりである。

(1) 従来特定の地域に結びつく風俗として限定的に理解されてきたシャーマニズムを、韓国社会全体で普遍的に行われているものとして新たに定義すること。そのために、全国の複数地点で同時期に調査を行い、依頼者の社会階層・事由など共通の調査項目にしたがってデータを収集する。地域の特性を勘案しつつも、地域を越えた共通点を見出すことに重点を置く。

(2) シャーマニズムの実態を、現代韓国人の心性と結びつけて理解すること。これまでシャーマニズムといえばシャーマン独特の語り・歌・振る舞いなどが注目されることが多かったが、本研究では依頼者の心理的・社会的背景やその他の宗教(仏教・キリスト教など)との関連性などを重視し、シャーマニズムが今日すたれるどころか拡大している理由を明らかにする。

(3) 歴史的には賤民扱いされてきたシャーマンが、今日どのような社会的地位を獲得しているのかについて、当事者への取材を行うこと。従来は世襲もしくは降神を契機にシャーマンの職能を身に付けた者が大半であったが、現在は霊験あるシャーマンへの入門・教育という道があり、シャーマンの数を増やす結果になっている。また民族固有の文化を重視する昨今の傾向から、シャーマニズムに対する学問的関心が高まり、シャーマンの社会的地位が向上していると推測される。最近ではシャーマンや神がかり的なことを題材にした映画・ドラマなども目に付くようになった。こうした今日的な実態を明らかにすることも、本研究の目的の一つである。

(4) 韓国を、日本を含む東アジアや、モンゴルなどの中央アジアといったより広い地域との関連性の中に位置づけることで、その歴史伝統を世界と連動するものとしてとらえること。特に韓国国内において、自国の歴史伝統を他国より優れたもの・先進的なものと評価したがる傾向があるが、シャーマニズムという古い風俗であっても民族的固有性ばかりに価値を置くのではなく、人類の歴史の中で客観的に位置づけを行うことが、学問的態度としてより適切であると考えられる。

以上のように、本研究は従来の特定地域の風俗を理解するものとしてのシャーマニズム研究ではなく、現代韓国人の間に幅広く存在している「運命・神的なもの」や「目に見えない・霊的なもの」への信頼・期待・依存といった心性を理解し、それを通じて韓国社会の問題点・人々の不満や不安のありかをあ

ぶりだすために行われる。シャーマニズムを前近代的・非文化的なもののみならず、社会の動態に即したきわめて今日的なものにとらえ、今後も継続・発展していくという見込みのもとに、現時点での一定の見取り図を示すことが、本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

韓国人の日常生活に深く結びついたシャーマニズムではあるが、その実態は外国人にはわかりにくい。本研究の代表者は言語・土地勘・人脈など韓国人としての優位性に基づいて実地調査を行い、その成果を日本語で発表することで、現代韓国の社会生活や文化全般に対する日本人の理解を促進するように努める。

(1) 韓国国内で複数回の調査を実施する。韓国でシャーマンが活躍するのは主に死者を慰める儀式(死霊祭) 治病、進学・就職・結婚についての占い、厄払い等の場面であり、依頼者の必要に応じて随時行われている。調査の地点は可能なかぎり多数設定することとし、ソウルを中心とする北部、釜山を中心とする南部の「南北」軸を設けると同時に、慶尚道地域(東部)、全羅道地域(西部)の「東西」軸を設ける。さらに同じ広域市内でも、市中心部と郊外(農村部)の両方に目配りする必要もある。以上の理由から、首都ソウルのほかに、重点地域として全州、大邱、釜山を選定する。これらはいずれも首都圏以外であって、比較的都市化が進み、周辺に名山または海浜などシャーマンの活動拠点を有するという共通点がある。

(2) 調査地点においては各地域の特性、地理的環境を把握したあと、祭儀場(クツ堂)や占い屋を中心にシャーマンの活動を調査し、録画・録音も行う。シャーマンに対しては学歴・経歴・生活状況や、当地における祭儀の実態・頻度・報酬単価などを聞き取り、依頼者に対しては依頼の事由や当該シャーマンを選定した理由、他の宗教信仰の有無などを聞き取る。

(3) 韓国シャーマニズム特有の事情や社会的背景を考察するために、日本や東アジア諸地域のシャーマニズムとの比較研究を行う。具体的には、代表者が研究協力者として参加する科研費基盤研究(A)「身心変容技法の比較宗教学」(研究代表者:鎌田東二)の定例研究会「身心変容技法研究会」において研究発表を行い、人間の精神と肉体を結ぶものとしての祈り・歌・舞踊・行などに着目するメンバーとの学術交流を推進する。

### 4. 研究成果

(1) 研究期間の間に4回の実地調査を行った。その時期と調査地点は次の通りである。  
2014年8月~9月:ソウル、蔚山、大邱  
2015年8月:釜山、蔚山、東海岸  
2017年2月:ソウル、慶州、蔚山、東海岸  
2017年3月:釜山、蔚山、東海岸、珍島

当初計画していた全州では諸般の事情により調査が実現しなかったが(注:科研費を用いた調査は行わなかったが、私費で訪問し小規模な実地見学を行った)そのかわりに全羅道地域(西部)に属する珍島での調査を行うことができた。また東部では当初の予定より多くの地域で調査を行うことができた。調査の詳細(訪問場所や儀式の名称)は以下の通りである。

公開または非公開で行われた祭儀の録画・撮影、およびシャーマンや儀式の依頼者に対するインタビュー。ソウル:仁旺山国師堂での神爵クツ(降神巫李氏が自らに憑いている神を讃え霊力を高めるための儀式)、蔚山:世襲巫文氏の神堂調査、大邱:八公山の祈禱処および瀑浦クツ堂での帝釈クツ(治病および財運を祈願する儀式)、釜山:「挺身隊解怨相生大同ハンマダン」クツ(内容は後述)、東海岸:文武大王水中陵における部落祭および周辺祈禱処の調査。

都市部の繁華街における占い屋の分布・占い内容についての調査。大邱:市内中心部、蔚山:市東部易学館、ソウル:梨花女子大学前、弘益大学周辺、江南口デオ通り。

従来の祭儀とは異なる場面でのシャーマンの活動。ソウル:光化門広場前「ろうそく集会」および「少女像」周辺での巫俗パフォーマンス、珍島および周辺沿海部:セウォル号事件現場近くでの祈禱、慰霊祭。

以上の調査からは現代韓国におけるシャーマニズムについていくつかの重要な事実がわかった。まず、地域共同体の安寧を祈る部落祭や、死者の魂を慰める死霊祭は、前近代より農村社会で行われてきた代表的な巫俗儀式であるが、今日は地縁・血縁に縛られることなく、都市部において社会的な要請によって行われることも多い。例えば2015年8月14日に釜山・影島大橋付近で行われた「挺身隊解怨相生大同ハンマダン」クツは、終戦70年を記念し、すでに亡くなった慰安婦の魂を慰めることを目的としていた。周知のとおり慰安婦問題は現在日韓両国の間にわだかまる重要な課題であるが、2015年8月当時はまだ政府間の合意もなく、政治的解決に見通しがつかない状況であった。当事者たる慰安婦たちは高齢化し、慰めを得られないまま次々にこの世を去っており、国民の多くが不条理を感じていた。まさにその局面で、著名で霊験あるシャーマンが複数登場し、祈りや舞を捧げる儀式を執り行い、市の後援によって野外での一大パフォーマンスになった。このことは、シャーマニズムが社会の安定や人心の調和のために、為政者からも積極的に用いられたことを示している。

一方で、2016年後半から2017年にかけて高まったパク・クネ政権に対する抗議運動の際には、若者を中心とする市民が主体となって巫俗パフォーマンス(祈りや舞楽など)を行った。すなわち、ソウル中心部で繰り返し開かれた「ろうそく集会」や「少女像」周辺

では、慰安婦問題に関する政府間合意に反対する活動と、セウォル号沈没事故の犠牲者に対する追悼が結びつき、死者への祈りと同時に生者たちの怒りを鎮めることが必要となった。シャーマニズムは、市民にとって最も身近な宗教信仰として採用されたのであり、現代韓国人にとってシャーマニズムが重要な存在であることを証明している。

以上のことは、シャーマン本人や依頼者へのインタビューによっても裏付けられた。この世とあの世をつなぐためのシャーマンの存在や、神の意思を尋ねるといふ行為自体、韓国人にとっては馴染みの深いものである。現在においても進学・就職・結婚などの個人生活の節目に吉凶を占う（神にうかがいをたてる）ことが一般的に行われており、財界人や政治家の中にも投資や選挙出馬の判断を占い師に頼る場合が珍しくない。占いは、巫俗の中で最も現代化した機能であると言うことができ、ソウル中心部の繁華街に占い屋が急増していることから裏付けられる。占い師やシャーマンはテレビドラマやバラエティ番組のモチーフとしてもしばしば取り上げられ、ますます一般化している。シャーマンや占い師の需要が増えたため、従来は降神巫が多かったが、現在では技術指導を受けて職業としてのシャーマンを選択するケースも増えている。

(2) 上記の調査の成果を身心変容技法研究会および人体科学会第24回全国大会で口頭発表し、のちに2本の論文として『身心変容技法研究』にそれぞれ発表した。まず「現代韓国におけるシャーマニズムと「癒し」の実態」(『身心変容技法研究』第4号、2015年)においては、韓国におけるシャーマニズムの成り立ちを概観したあとで、今日社会の各分野に及ぼすシャーマニズムの影響を論じた。取り上げた分野が文化・芸術、放送・出版、美容・成形、教育、政治・社会と幅広く、現地調査で得た情報に加え、各メディアのウェブ版で最新情報を収集したため、韓国シャーマニズムの最新の実態を伝える内容となった。ここでは競争や格差の激しい韓国社会において、シャーマニズム(儀式や占い)の結果よりも、過程(神の前にぬかづくことや祈ること)に慰めを得る人々が多いことを結論的に述べた。

「韓国シャーマニズムの「巫病」に見る身心変容」(『身心変容技法研究』第5号、2016年)では、韓国でシャーマンの基本要件として挙げられている「巫病」(それを克服することによって普通の人間から巫堂へ生まれ変わるとされる、原因不明の身心の変調)に注目した。欧米化した社会において巫俗は前近代的なものに見なされがちであり、巫堂の社会的地位も高くないが、それでもなお人々に必要とされる背景として、巫堂が病の克服を経験したことで不調和から調和への回復を体現する存在であることを指摘した。人が病や死と向き合わざるを得ない状況になっ

た時巫堂を頼るのは、病を克服して神に近づいた巫堂が宗教的司祭であるからだ。韓国シャーマニズムが迷信ではなく宗教であることは、これによって裏付けられている。

本研究の成果としての一連の論文は、身心変容技法研究会に集まる宗教学・文化人類学・人体科学等の専門家から大きな反響を得た。これを契機として、日本やアジアのシャーマニズム研究者とも交流が広がり、2015年7月に行われたNPO法人東京自由大学のシンポジウム「シャーマニズムの未来 part アジアのシャーマン：大陸・半島・列島を貫く基層文化」では、満洲やモンゴルのシャーマニズム研究者と討論を行い、韓国の特性を考察するのに重要な手がかりを得ることができた。

さらに、韓国人の宗教的心性と巫俗の影響力については、「韓国における宗教と和解：戦争の記憶とシャーマニズム」と題して、オーストラリア国立大学で発表した(講座「東アジアにおける戦争と和解」での招待講演、2017年3月)。ソウルや釜山での調査に基づき、慰安婦問題と「少女像」をめぐる国家間の葛藤の中、民間が主体となって「癒し」を求める動きを紹介した。戦争の傷跡をどのように癒すかは、アジア・太平洋地域に共通の課題であるとも言え、韓国シャーマニズムの活発な働きは、アジア系移民を多く含むオーストラリアの学生・教員の高い関心を引いた。

総じて、本研究は独自の着眼点により、日本や韓国のみならず、中国、モンゴル、オーストラリアの研究者からも幅広い注目を集めた。今後は、それぞれの歴史的背景を踏まえつつ、21世紀のシャーマニズムのあり方や、宗教信仰の普遍的な姿を考察する共同研究に発展する可能性がある。以後継続的にそれらの研究者と連絡を取り合い、これからの研究の方向性について意見交換を進める予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

金香淑、韓国シャーマニズムの「巫病」に見る身心変容、身心変容技法研究、査読無、第5号、2016、pp.92 - 98

金香淑、現代韓国におけるシャーマニズムと「癒し」の実態、身心変容技法研究、査読無、第4号、2015、pp.98 - 107

〔学会発表〕(計4件)(うち と は招待講演)

金香淑、現代韓国における宗教と和解：戦争の記憶とシャーマニズム、オーストラリア国立大学 講座「東アジアにおける戦争と和解」、2017年3月21日、キャンベラ(オー

ストラリア)

金香淑、癒しとしての現代韓国シャーマニズム、NPO 法人東京自由大学主催、シンポジウム「シャーマニズムの未来 part アジアのシャーマン：大陸・半島・列島を貫く基層文化」、2015年7月19日、角川本社ビル(東京)

金香淑、韓国シャーマニズムの身心変容技法 巫舞を中心に、人体科学会第24回全国大会、2014年11月29日、京都大学(京都市)

金香淑、現代韓国におけるシャーマニズムと「癒し」の実態、身心変容技法研究会、2014年11月13日、京都大学(京都市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

金香淑 (KIM, Hyangsuk)

京都大学・こころの未来研究センター・連携研究員

研究者番号：70548106

### (2) 研究協力者

李哲秀 (LEE, Chulsoo)

易学者、甲山哲学館館長、韓国易術学会中央学術委員